第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamoto　決算

「アフリカの子どもの日」実行委員会
実行委員長　永野　光哉

2010年7月2・3・4日実施

収　入		予　算	決　算
2009年度より繰越金		170,000	170,000
日本ユニセフ協会	地域普及助成金	1,500,000	1,500,000
会費	交流会　@ 5,000×80　3,000×26　1,000×143	700,000	621,000
	昼食　@500×120	80,000	60,000
助成金	熊日文化スポーツ基金(200,000)　熊本放送文化振興財団(100,000)	500,000	300,000
カード助成金	2009年度カード取扱助成金	284,635	284,635
その他の収入	花の薪能・小橋様寄付金及びバザー益金	125,000	364,500
合計		3,359,635	3,300,135

支　出		予　算	決　算
会場費	熊本学園大学(2日間)	200,000	155,500
交通費	県外から参加のアフリカからの留学生59名分	800,000	857,910
	大使・講師旅費　5名	300,000	269,153
	アフリカの留学生・講師送迎バス代(2日間)	20,000	55,000
	大使・講師移動タクシー代	10,000	15,260
保険料	アフリカの留学生・参加者2日間及びサッカー	15,000	20,232
会議費	7/2大使・講師打ち合わせ及び水俣訪問・サッカー費用	60,000	83,033
	7/3大使・アフリカの留学生・講師打ち合わせ(昼・夜)	50,000	55,210
	7/3交流会(キャッスル)	1,100,000	1,044,837
	7/4昼食(交流会)	150,000	149,059
講師料	講師　9名	200,000	230,000
分科会費用	料理・お茶席	50,000	33,475
運搬料	国旗・大太鼓・お茶席道具運搬料	30,000	42,000
通信費		30,000	10,110
資料作成・写真代	チラシ・プログラム・写真プリント代	80,000	90,129
実行委員会会議費	会場費他(4回)	80,000	51,389
報告書作成費		130,000	119,700
予備費	雑費(名札ケース・振込み料他)	54,635	10,321
合計		3,359,635	3,292,318

(収入)　3,300,135　－　(支出) 3,292,318　＝　(差額)7,817

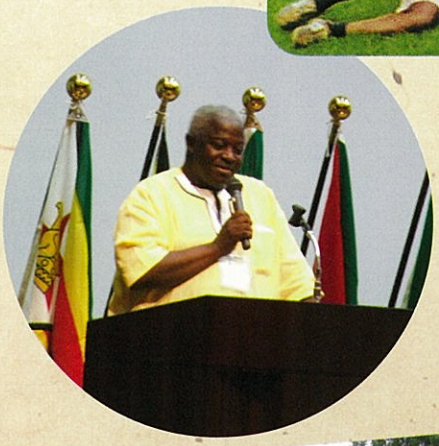
unicef

第18回 アフリカの子どもの日 in Kumamoto

2010年 7月2日～4日

第18回 アフリカの子どもの日 in Kumamoto 実行委員会

ワスワ・ビリ
早水研



和崎春
ダギジマナ・ジャ

熊本市立
必由館高等学校

第18回 アフリカの子どもの日 in Kumamoto

～もっと知ろうアフリカ2010：独立から50年、そして新たな挑戦～

「アフリカの子どもの日」とは

1976年6月16日、人種隔離政策下の南アフリカ共和国・ソウェトの黒人居住区で、アフリカーンス語強制に反対する学生たちが抗議活動を展開。それに対し、軍隊が無差別に大量虐殺する事件が起こり、南アフリカ最大の悲劇となりました。この日をアフリカの子ども達に捧げることによって、政府やＮＧＯ、国際機関、一般市民、特に世界の子どもが、アフリカ大陸の子どもの生存と発育の機会を活かすことを考えることを期待して、1990年当時のアフリカ統一機構（OAU）加盟の51ケ国が、「子どもの権利および福祉に関するアフリカ憲章」を採択し、1991年より世界各地で「アフリカの子どもの日」の記念行事が開催されています。熊本県支部では1993年設立当初より、連続18年この催しを行なっています。

18回目の「アフリカの子どもの日」in Kumamoto

今年は「アフリカの年」と言われた1960年から、ちょうど半世紀になります。50年前の1960年にはアフリカ大陸で17の国が植民地から独立を果たしました。しかし、その後の新生独立国の前途は必ずしも平坦ではなく、多くの国が大国との力関係に翻弄されながら武力紛争や飢餓、貧困を経験しました。

第18回になる今年の「アフリカの子どもの日」in Kumamotoには、1962年に独立し、内戦を経て、アフリカ大陸でリーダー的な地位を占めるにいたったウガンダ共和国のワスワ・ビリグア特命全権大使をお招きして、アフリカの歴史を振り返ると同時に、いま、若者が取り組むべき課題は何かを考える機会をもつことができればと願っております。

今年も「アフリカの子どもの日」in Kumamotoを通して、アフリカの若者と熊本の若者がともに学び、考え、未来に進んでいくひとつのチャンスになればとの願いを込めて企画いたしました。

ごあいさつ

第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamoto実行委員会
委員長 永野 光哉

第18回「アフリカのこどもの日」inKumamotoにご参加いただき、ありがとうございます。

特に、ウガンダ共和国特命全権大使のワスク・ビリグア様をはじめ、アフリカ各国の皆様には感謝申し上げます。

今年は南アフリカでサッカーのワールドカップが開かれ、アフリカに世界の注目が集まっていますが、私たちは毎年、「アフリカを知ることが世界を知り、よりよい未来を創ることにつながる」との思いから、アフリカの抱える課題をともに学び考えてまいりました。今回は従来の中高校生に加え、多くの大学生も参加、準備を進めてきました。日本各地から過去最多となる約80人のアフリカの留学生を迎え、真剣かつ有意義な討議や、楽しい交流が展開されるものと期待しています。

最後になりましたが、大使や特別講演、分科会の先生方、この催しにご支援ご協力いただいたすべての皆様に心からお礼を申し上げます。

第18回 アフリカの子どもの日 in Kumamoto

日　程　表

7.2 Fri

◆ウガンダ駐日大使とともに考える世界の環境問題
水俣市立水俣病資料館

◆サッカー親善試合（17:00より熊本学園大学）
アフリカ出身の若者と熊本の若者による親善交流試合

永野光哉実行委員長挨拶

開会宣言

7.3 Sat
熊本学園大学

13:30　オープニング

14:10　基調講演「日本の、そしてアフリカの若者への課題」
ワスワ・ビリグア特命全権大使（ウガンダ共和国）

講話「アフリカの年」から半世紀
和崎春日氏（中部大学教授）

15:20　パネルディスカッション

16:40　終了

18:30　交流会：ホテルキャッスル

オープニング・歓迎の仕舞

7.4 Sun
熊本学園大学

9:00　開始式

9:10　特別講演「持続可能な開発：水俣に教えられること」
原田正純医師

10:00　分科会
①ウガンダの歴史と課題
②アフリカから学ぶこと
③アフリカ・日本　子どものいのちの重さ
④日本におけるアフリカ報道と現実
⑤アフリカへの支援-私たちにできること
⑥アフリカの太鼓をたたこう
⑦アフリカの料理に挑戦
⑧アフリカと日本における教育の現状と展望

ギニア木琴演奏

12:00　昼食　アフリカと日本の料理を楽しむ

13:00　分科会の報告・みんなで語ろうアフリカ！

15:30　閉会

熊本県庁 蒲島郁夫熊本県知事 表敬訪問

蒲島知事、ウガンダ大使と歓談

留学生の自己紹介のようす

第18回「アフリカの子どもの日」に参加して

(財)日本ユニセフ協会 専務理事　早水　研

熊本県支部主催の「アフリカの子どもの日」に初めて参加させて頂き、支部の皆様のエネルギーと、学生さんたちを中心としたボランティアの方々の意気込みをひしひしと感じました。このような盛り上がりの中でアフリカからの留学生や多くの日本の若い人たちと交流し、パネリストとして、また分科会の講師として参加させていただいたことは、ユニセフの啓蒙・広報活動に携わる者として本当に有意義な2日間でした。永野会長、世良事務局長ほか、このイベントを成功に導かれた全ての関係者に敬意を表しますと共に、心から御礼申し上げます。今回、過去最多の約70名ものアフリカ留学生をホームステイで迎えておられましたが、留学生の間で人気が高まり、断るのに苦労されたと伺いました。これだけ中身の濃いイベントが、熊本の地で18年も続けてこられたわけですから、それも当然でしょう。日本の高校生たちの積極的な参加もとても印象的でした。主催された皆様のご苦労は並大抵ではなかったと推察しますが、参加者・関係者の全員が感じられた達成感を糧に、これからもお元気で活躍されますよう祈っております。ありがとうございました。

参加者からのメッセージ

アフリカ諸国と熊本

熊本大学長
谷口　功
（熊本県支部 理事）

過日、第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoと題した、ユニセフ熊本県支部主催の集まりに参加する機会を得た。アフリカ諸国から我が国に留学中の学生やその家族の方々等約80名と、熊本の高校生・大学生、市民の皆様など延べ1000名に及ぶ方々が参集された。さわやかで楽しい集まりであった。

この会でアフリカには50を超える国があることを改めて認識した。また、ウガンダ共和国のワスワ・ビリグア特命全権大使のお話は、アフリカの実情を理解するにふさわしい内容で、特に、アフリカ諸国におけるエイズの現状や飲み水に由来する部族間の争いの話は、熊本との関係において極めて興味深いものであった。

熊本大学は、我が国唯一のエイズ学研究センターを持っている。エイズ撲滅のための世界的な拠点としての先端的な教育研究を進めており、治療薬の開発にも大きく貢献している。また、熊本は水（地下水）の都でもあり、水に関する極めて高い学術と技術水準を有している。これを基盤として命の源としての水をマネージメントできる人材を育てる国際プロジェクトも我が国の支援を得て始まったところである。これらは、熊本がアフリカ諸国の将来とその発展に、若者の交流と人材育成を通して、大きな寄与を可能とする基盤となる。

「アフリカの子どもの日」は、熊本とアフリカ諸国との繋がりを確信した意義深い集まりであった。

澤　良世
（前ユニセフ駐日事務所広報官）

第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoは、アフリカの23カ国からの留学生やそのご家族など、約80名の参加を得て開催されました。基調講演でワスワ・ビリグア・ウガンダ共和国特命全権大使はアフリカの「物語」の伝統にふれ、貧しい家庭で育ち、いつも空腹を抱えていた子ども時代の経験を紹介し、17歳のときに音楽の勉強をするためにボストンに行き、ハーバード大学の学生から学生食堂の食券をもらって暮らしたことなどを、ご自身の「物語」として話されました。そして、参加したアフリカの留学生にとっても日本までの長い道のりは決して平たんではなかったはずで、想像もできないような過酷な経験を経て日本で学ぶ機会を手に入れたに違いない、といい、日本の若い人には、留学生一人ひとりの「物語」からアフリカの現状を学んでほしい、とおっしゃいました。

大使はまた、ビクトリア湖の水位低下やナイジェリアのデルタ地域の環境汚染、ソマリア沿岸での有毒物質投棄など、アフリカの多くの国が直面するさまざまな環境問題にふれ、日本で学ぶアフリカの留学生には水俣の経験から教訓を学び、それぞれの国で役立ててほしい、といわれました。

熊本は「アフリカの子どもの日」が毎年開催される日本で唯一の都市です。いつか合宿形式の「アフリカの子どもの日」in Kumamotoを催し、アフリカと日本の若者たちがそれぞれの「物語」から学び合うために語り明かすことができたら・・・と考えています。

特別講演

「持続可能な開発、水俣に教えられる事」

医師　原田正純氏

水俣病は、チッソ水俣工場から水銀を含んだ工場排水が水俣湾に流れ、一度は薄まるがそれを魚が食べると濃縮され、その水銀に汚染された魚介類を人々が食べることで中毒になって起こった病気です。深刻な問題は、妊娠中の母親が魚介類を食べたことで胎盤を通って赤ちゃんが中毒になり、70人を超える胎児性水俣病の赤ちゃんが生まれたことです。日本には臍の緒を保存する習慣があります。赤ちゃんの臍の緒の水銀量を測定すると、環境の水銀汚染と臍の緒の水銀値が一致します。おかあさんの子宮は環境であり、環境を汚すということは子宮が汚れることです。自然界にある毒物に対して子宮は赤ちゃんを守ることができますが、自然界にまったくないものは胎盤を通ってしまいます。人類は新しい化学物質を開発しましたが、その化学物質が原因で障害を持った赤ちゃんが生まれてしまいました。

海外での調査で、カナダの先住民居留地でも水銀汚染が起きています。先住民の長い髪の毛の水銀値には、濃度の高い部分と低い部分がありました。冬は湖が凍り魚を食べないので低く、夏に伸びた髪の部分の水銀値は高いことがわかったのです。中国でも工場排水により川が汚染されているところがあります。ブラジルのケースは、金を採掘するときに水銀を使うため鉱山労働者が水銀中毒になりました。アマゾン川の上流で金の採掘をしているのでアマゾン川も水銀で汚染され、その下流の環境に住んでいる人々が水銀中毒になるおそれがあります。アフリカのビクトリア湖周辺でも金の鉱山があり水銀が多く使われています。多くの人が湖の魚を食べていますが、調査では今のところ危険な状態ではありませんでした。ところが、ある女性が水銀中毒ではないかと尋ねてきて、調査したところ水銀の入った石鹸を常用していました。これも将来危険な状態になるかもしれません。

水俣病は日本ではよく知られた悲劇ですが、世界中で同じような水銀汚染による問題が起きています。水俣での教訓を世界中で活かしてもらいたいと思います。

7月2日(金)　水俣ツアー〈水俣市立水俣病資料館〉

「ウガンダ駐日大使とともに考える環境問題」

今回は水俣訪問希望の留学生が多く、2班に分かれての訪問でした。第一班26名、第二班25名計51名のバスツアーとなりました。行程は水俣市立水俣病資料館、エコパーク、チッソ工場排水口の順で廻りました。資料館では水俣病の概要説明のビデオ鑑賞、その後、下川館長の案内で館内を見学しましたがみんな熱心に説明に耳を傾けていました。水俣のきれいな海を望むエコパークでは資料館での説明にみんな様々な思いで散策。その後バスに乗りこみチッソ工場の排水口を見学し帰途に着きました。帰りの車内では留学生がそれぞれの国のご当地ソングを一緒になって歌い場を盛り上げ、にぎやかに一路熊本市内へと向かいました。

大使は祖国の将来を担う留学生に、ここで学んだことを国に帰ってからしっかり役立ててくださいと翌日の講演の中で述べられ、有意義だった水俣訪問を締めくくられました。

ウガンダ大使基調講演

「日本の、そしてアフリカの若者への課題」

ワスワ・ビリグワ・ウガンダ共和国全権特命大使

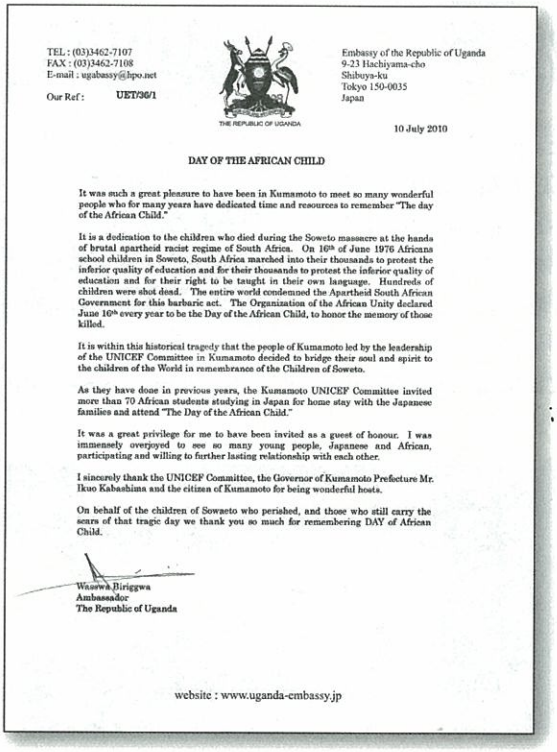
1948年、カンパラ生まれ。ニューイングランド音楽院（米国）で学んだ後、ボストン大学（米国）とフレッチャー法律・外交大学院（タフツ大学／ハーバード大学）で修士号を取得し、ハーバード大学行政学大学院で公共財政・多国籍企業について研究。米国企業に勤務した後、1984年にウガンダに戻り、独立運動に参加。ウガンダ・コーヒー・マーケティング委員会の再編や、サハラ以南のアフリカで最初の携帯電話会社のセルテルをウガンダ、ザンビア、マラウイ、シエラレオネなど13カ国で設立。2002−05年、エチオピア・ジブチ・ソマリア担当大使。地域組織のAUやIGADの要職を兼務。2006年から日本・韓国・フィリピン・ブルネイ全権特命大使を務める。

私は62年前、ウガンダで生まれました。6人きょうだいで家に食べ物がないのがわかっていたので教会に行ってその周辺で過ごしました。家に帰るのがつらかったからです。私は音楽の才能があって、米国のボストンに行き唯一の知り合いがハーバード大学にいたのでそこの寮で二ヶ月間生活しました。これが17歳のときの経験です。アフリカの若者が勉強することは大変です。勉強したくても朝起きて一時間位は畑を耕したり、水汲みをした後に7〜10マイル離れた学校に通います。学校では昼食もなく空腹で学習能力は落ちるし、ノートや教科書もなく地面に座って読み書きをしないといけない現状があります。ウガンダの問題点として反体制勢力の神の抵抗軍（LRA）のゲリラ活動があり、さまざまな残虐行為を行っていて子どもを誘拐し兵士の妻として働かせたり、子ども兵士になり殺りくの道具として大人に使われています。子どもたちには保護が必要なのです。

ウガンダの周辺国でも紛争があります。ウガンダとルワンダの大統領がコンゴ民主共和国の独立記念日に訪問してこの地域を統一しようという良いニュースが13年ぶりに発表されたのです。

今回水俣を訪問しましたがこのようなことはアフリカでも起きています。ナイジェリアのデルタ地域では石油が流失し周辺住民が危険にさらされています。ソマリアの海岸線は100kmに及び西欧から有害物質を持ってきて海に投棄しソマリアが無政府状態なので、それをいいことに海を汚染しているのです。世界は困難に直面しています。平和がなければ開発は実現しないし安全に生きていけません。

エイズについて、ウガンダでは大統領夫妻がエイズ問題を深刻に受け止め、エイズを理解しオープンにする政策をとっていて、学校を使って一般の人々への啓蒙活動を行いこれによってHIV感染率が30%から6%まで下がりました。マラリアの蔓延もあり多くの子どもたちの命が奪われていますが、ユニセフの支援で蚊帳の普及に努めています。



TEL : (03)3462-7107
FAX : (03)3462-7108
E-mail : ugabassy@hpo.net

Our Ref : UET/36/1

THE REPUBLIC OF UGANDA

Embassy of the Republic of Uganda
9-23 Hachiyama-cho
Shibuya-ku
Tokyo 150-0035
Japan

10 July 2010

DAY OF THE AFRICAN CHILD

It was such a great pleasure to have been in Kumamoto to meet so many wonderful people who for many years have dedicated time and resources to remember "The day of the African Child."

It is a dedication to the children who died during the Soweto massacre at the hands of brutal apartheid racist regime of South Africa. On 16th of June 1976 Africans school children in Soweto, South Africa marched into their thousands to protest the inferior quality of education and for their thousands to protest the inferior quality of education and for their right to be taught in their own language. Hundreds of children were shot dead. The entire world condemned the Apartheid South African Government for this barbaric act. The Organization of the African Unity declared June 16th every year to be the Day of the African Child, to honor the memory of those killed.

It is within this historical tragedy that the people of Kumamoto led by the leadership of the UNICEF Committee in Kumamoto decided to bridge their soul and spirit to the children of the World in remembrance of the Children of Soweto.

As they have done in previous years, the Kumamoto UNICEF Committee invited more than 70 African students studying in Japan for home stay with the Japanese families and attend "The Day of the African Child."

It was a great privilege for me to have been invited as a guest of honour. I was immensely overjoyed to see so many young people, Japanese and African, participating and willing to further lasting relationship with each other.

I sincerely thank the UNICEF Committee, the Governor of Kumamoto Prefecture Mr. Ikuo Kabashima and the citizen of Kumamoto for being wonderful hosts.

On behalf of the children of Soweto who perished, and those who still carry the scars of that tragic day we thank you so much for remembering DAY of African Child.

Waswa Biriggwa
Ambassador
The Republic of Uganda

website : www.uganda-embassy.jp

地球温暖化などの環境問題に関して、砂漠化して遊牧民が遊牧地を追われたりしています。エジプト、スーダンでは水の権利を主張して紛争になっていて水の問題はアフリカだけのことでなく世界の問題です。限られた資源を有効に使うことを考えるべきです。

日本では豊かな生活ができますが、そのつけはアフリカにきていることを忘れないでください。ウガンダでは多くの青年海外協力隊員が活動しています。このようにアフリカに行ってアフリカを知る努力をして世界に興味を持ってほしいと思います。

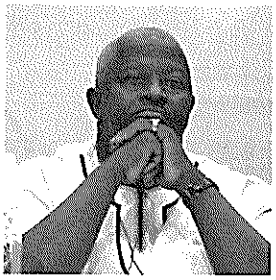
そして、両国の関係がより緊密になるよう願っています。

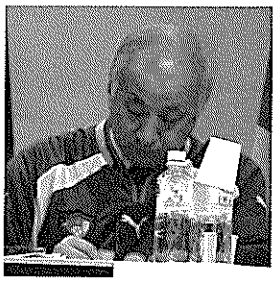
パネルディスカッション

パネリスト　ワスワ・ビリグア特命全権大使（ウガンダ共和国）
和崎春日氏（中部大学教授）
早水　研氏（（財）日本ユニセフ協会専務理事）
徳永瑞子氏（アフリカ友の会代表）
ンダギジマナ・ジャスティン氏（ルワンダ留学生・熊本大学）

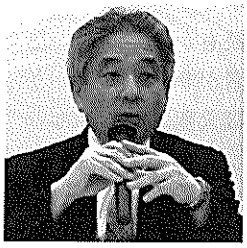
司　会　澤　良世氏（前ユニセフ駐日事務所広報官）

ウガンダ駐日大使の講演を受けて、パネリストの方々の、アフリカで永年に渡って活動しておられる内容や、アフリカへの思い、体験談を話していただきました。ウガンダ駐日大使は基調講演で話を伺い、和崎春日先生は講話で話していただきましたので、このパネル・ディスカッションでは、日本ユニセフ協会専務理事の早水研氏、アフリカ友の会の徳永瑞子氏、ルワンダから熊本大学に留学中のンダギジマナ・ジャスティン氏に話を伺いました。





早水 研氏

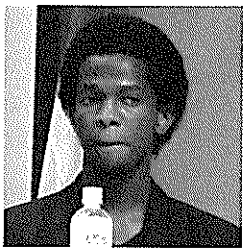


ユニセフは世界150カ国以上で活動していて、活動資金の 52.3%がサハラ以南で使われている。その中でも紛争の緊急支援に多くが使われていて、私もアフガニスタンやスーダンのダルフールに行った。スワジランドはHIV/エイズの感染率が非常に高く30%に達しているが、厳しい状況の中でも子どもたちの目は輝いていて、将来に向かって夢を持って生きている。彼らは私たち外国人に対して、何か手助けすることはないかと声をかけてくれ、そのやさしさと連帯感がとてもうれしかった。近年、気候変動に伴う降水量が減少し、ダルフール紛争は水の問題が原因である。どんな支援が必要か考えないといけない状況である。

徳永瑞子氏

看護師、助産師として、ザイールで８年間母子保健関係の仕事に従事し、その後エチオピアで7ヶ月間干ばつ被災民の支援活動をした。1993年からは中央アフリカ共和国でエイズ患者の人たちと一緒に活動している。なぜアフリカにここまでのめりこんだのかというと、アフリカの人たちは20代の私にお産のことや医療の仕事をいろいろ教えてくれ暖かく見守ってくれた。伝染病にかかった事もあるが、またアフリカに舞い戻った。アフリカは自分のふるさとであり、一生をアフリカにかけても悔いはないと思っている。

ンダギジマナ・ジャスティン氏



ルワンダは東アフリカに位置し、自然に恵まれ住みやすい国です。16年前の紛争で100万人の人が命を失い、300万人以上の人が難民となった。当時、私は小学校２年生だったが、多くの子どもたちは両親を失ったりして大変な生活をしていた。国内が戦争中に若い人たちや子どもたちが国外に出て行って勉強し、ルワンダに帰国して国の再建に向け頑張っている。急激に発展していて、私も日本で学んだ電力関係の分野で頑張ろうと思っている。

第18回
アフリカの子どもの日
in Kumamoto

「アフリカの年」から半世紀

和崎春日氏（中部大学教授）

独立50年でワールドカップがアフリカで開催されるというのはアフリカ発展の印。一方、ヨーロッパからの情報のみに学んでいる日本に憂いを感じている。精神的な物語の力があるアフリカ。その土地の言葉、文化を取り上げない情報はおかしい。野生（身体性）なワイルドな面が強調され、多くの人がブッシュマン、槍、と間違ったイメージを持っている。実際には首都は大都会、私たちが住んでいる街よりずっと都会。

ショショローザという歌があるが、前へ、前へ（前進）の意味がある。元は鉱山労働者の歌だが、多文化、結束を表している。地名、名前にしても正しい情報が必要。間違った情報は失礼に当たるし、尊厳にかかわる問題である。土地に対しても同様で、スペルから正しい名前を拾う必要がある。われわれは教科書においても間違った情報を学んでいる。国名もヨーロッパから与えられたものでよいのだろうか。

独立から50年の経過を経てアフリカに対しての評価のしかたを変換しなければならない。アカデミックソサイティーの「日本アフリカ学会」は会員数では№1.これはお互いが幸せになる証である。

7月2日（金）

サッカー親善交流試合

熊本学園大学多目的グランド

熊本学園大学の学生委員会のご協力で準備段階から当日まで順調に進められました。アフリカの留学生や学園大学、崇城大学、熊本大学の大学生、高校生、応援の人を含めると100名近くの参加者でたいへんな盛り上がりをみせました。熊本サッカー協会の井薫会長もかけつけていただき、「アフリカと日本の若者がサッカーというスポーツで交流できることは大変幸せなこと」と話されました。折しも南アフリカでワールドカップ開催中ということもあり、その話題もあちこちで聞かれました。

サッカー交流会に参加して

河野　将

このイベントの目的は、他国の留学生たちと、文化的相違点及び類似点について学び、それを分かち合うことです。今回、私はアフリカの留学生たちの「通訳者」として、ユニセフのイベントに参加しました。私はもともとニューヨーク出身で、毎年夏に、この熊本にいる家族に会いに来ています。

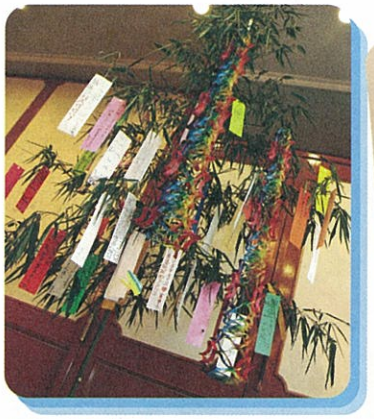
イベントの初日、アフリカの留学生たちは熊本の中・高・大学生たちとサッカーをするチャンスがありました。私は、アフリカの留学生たちと、そしてもちろん日本の学生たちとサッカーをすることに、とてもワクワクしていました。何故なら、私はいつもアメリカでサッカーをしてきましたが、日本人学生たちとサッカーをしたことがこれまで無かったからです。それで、これは私にとっても非常に素晴らしい経験になりました。このような機会に恵まれて皆さんとサッカーをすることができて、本当に嬉しかったです。

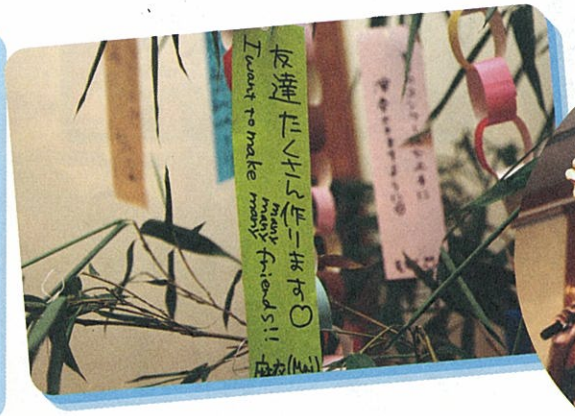
全体として、私はこのユニセフのイベントで、人生のターニングポイントとなる貴重な時間を過ごすことができました。来年も時間があれば、またぜひボランティアとして参加し、新しい友人を作りたいと思っています。そして、私に子どもができたら、その子どもも私と同じような経験ができるように、今後もずっとこのイベントが続くことを願っています。（翻訳：佐藤仁美）

交流会 ホテルキャッスル

交流会では、アフリカの若者ラファエル君(熊大卒業後、関東の自動車関係の会社勤務中)と日本の女子学生(熊大生の古林さん)が、浴衣姿で司会をしてくれました。熊本ジェンベクラブのジェンベ太鼓と、必湧館高校の和太鼓で、華々しいオープニングとなりました。音楽が専門のウガンダ大使は興味を示され、楽しんでおられたようでした。

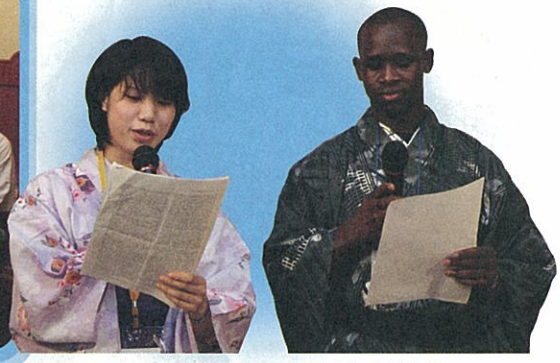
日本ユニセフ協会早水専務理事が歓迎の言葉を述べられ、初参加の寺崎副市長から元気の出るお言葉をアフリカ、日本の若者たちに頂きました。日頃から活動を支えて頂いている方々に舞台に上がって頂き、代表で谷口熊大学長が乾杯の音頭を取られました。ホテルではアフリカ料理も準備され、松田先生指導のマリスト学園生による茶席、藤間絲絵さん指導のさくら音頭、最後はジャンボのリズムに合わせて皆で賑やかに踊って、参加者344人の輝く笑顔に、同じ地球に生きている仲間であることを確かめることができました。





谷口熊大学長の音頭で乾杯！

マリスト学園茶道部 松田社中



司会のラファエル君、古林さん

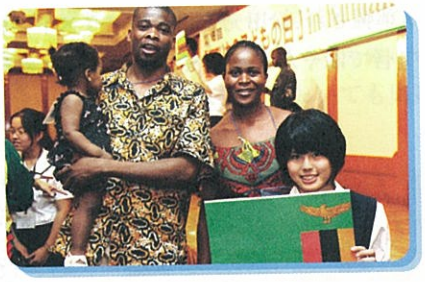
ジャンベで歓迎！

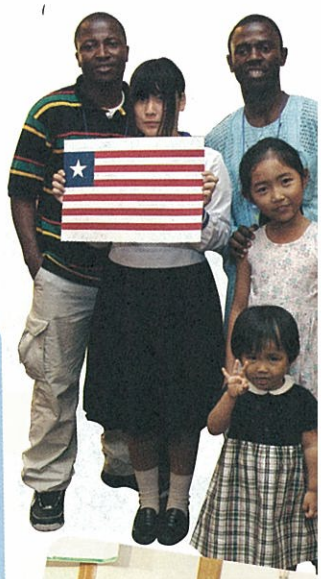
第18回
アフリカの子どもの日
in Kumamoto

交流会

23の国別に入場しました。
先導したのは未来を担う高校生とチビッ子たちです。
すべての国をのせられず一部をご紹介します。

参加者の国の国旗

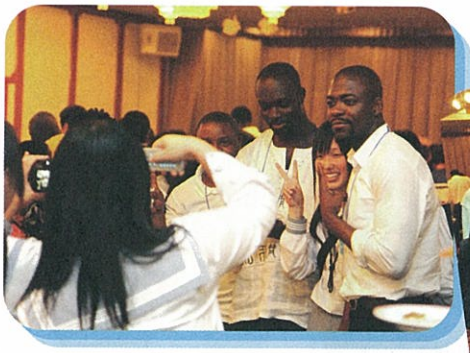


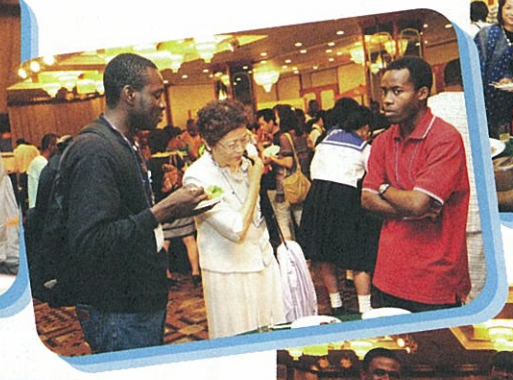


交流会

必由館高校の和太鼓

大使を囲んで



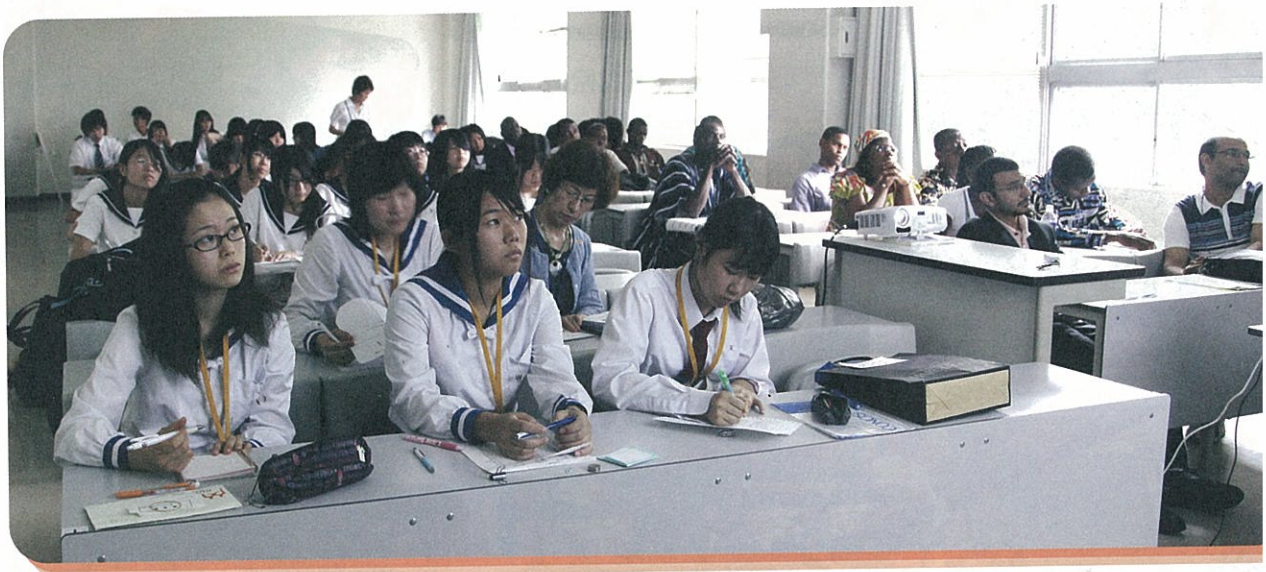


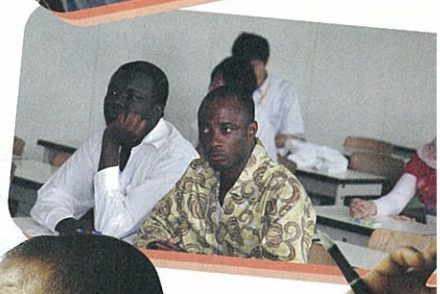
ハイチーズ！

そこここの
テーブルでの
歓談風景

第18回
アフリカの子どもの日
in Kumamoto

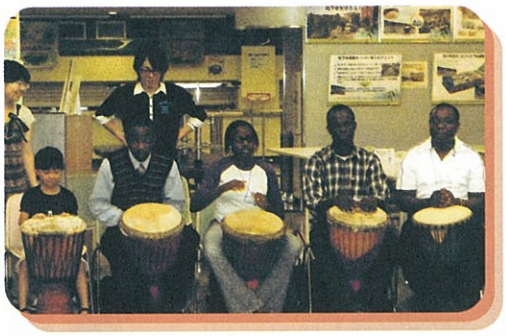
アフリカ・熊本の若者たちの輝き





アフリカ・熊本の若者たちの輝き

他の分科会のわかちあい

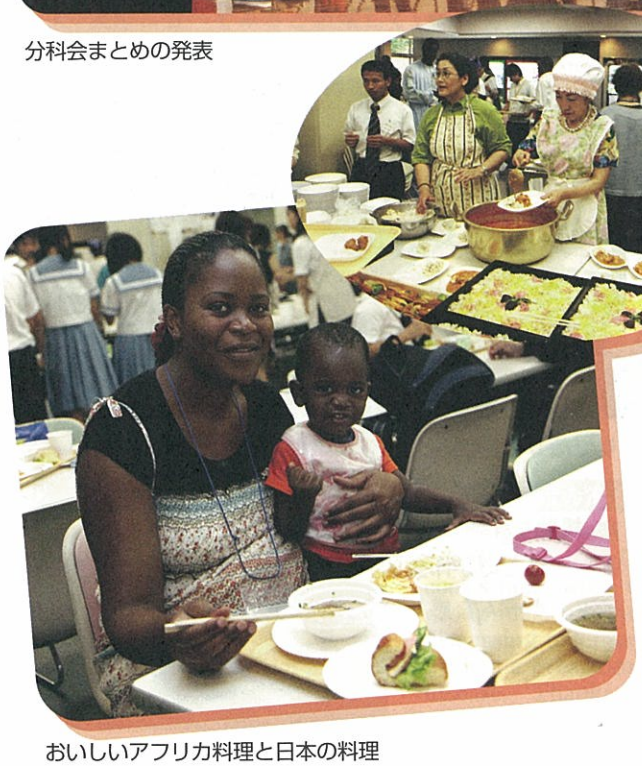


アフリカの音楽を楽しもう

分科会のようす

分科会まとめの発表

分科会のようす

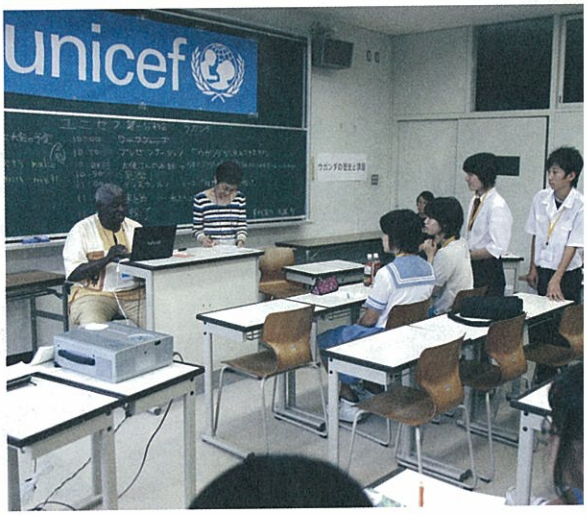


おいしいアフリカ料理と日本の料理

日本の料理「のっぺい汁」

分科会 ウガンダの歴史と課題

講師にウガンダ大使をお迎えし、ウガンダと日本の違いや、類似点、課題などについて考えた。そして、両国から見えてくる「私たちの理想の社会に近づくために何ができるか？」ということについて話し合った。ウガンダと日本を比べると、生活習慣も違うし、言葉や肌の色など沢山の違いがある。しかし、教育などは両国とも似たような課題を抱えている。相反するようで似ている両国の若者たちから、理想の社会に近づくために「沢山の人に会う、経験する」などの意見が出た。また、大使とコーディネー



ターの澤さんからは「ひとりひとり違うことは素晴らし
ことだ、互いを認め合おう」「様々なことに興味を持とう
の意見をいただいた。「ゆっくりでも少しずつ積み重ねれ
いつか大きいものになる」との大使の言葉を信じ、これか
理想の社会を目指して日々を過ごしたいと思います。

（実行委員　熊本高校　内尾昌

分科会 アフリカから学ぶこと

私たちの分科会「アフリカから学ぶこと」は、中部大学教授の和崎先生をお迎えしてお話を伺いました。去年参加した先輩から「気さくな先生」と聞いていたのですが、正にその通りでした。アフリカの留学生や私たち高校生にも、フレンドリーに接して頂き、和やかに進んでいきました。内容は、和崎先生と２人の留学生の方のお話を聴き、その中で疑問に思った事を質問して、それに３人の方から答えてもらうという形でした。和崎先生が英語混じ

りで話され、通訳の方もおられ、留学生も解りやすい
をされたので、非常に濃い時間を過ごすことができ
た。援助をするならばその国にあった援助をしてほ
と話されたのが印象的でした。最後に全員で写真を撮
アットホームな感じの分科会でした。

（実行委員　真和高校　田中聡

分科会 アフリカ・日本 子どものいのちの重さ

アフリカからの留学生と現地で活動された方から沢山のことを学んだ。まず1つ目は「お金を送る」だけではダメだということ。自分は、UNICEFの募金活動に一度参加させてもらったことがある。その時思ったのは「このお金があれば子供たちが助かる」と。しかし集めて送るだけじゃ意味がないと言う事を初めて知った。ワクチンを地方に持って行くために必要な道がなかったり、保存するための冷蔵庫を動かす電気がなかったり、ワクチンを使える医者がいなかったり問題が山積みだ。現地の事を学んだ

り予想外の事が起きても対処できる知識や行動が必要だということを学んだ。2つ目に、「感謝する心を持つこと」。僕たちは病気をしても最高の医療で治せる。学校にも行ける、1日3度も食べる事ができる、家も綺麗な水も着るものだってある。世界には当たり前な事は何もないと認識できた分科会だったと思う。これからも世界のことアフリカの事を知りたくなったし、実際の現場にも行ってみたくなった。　（実行委員　御船高校　山下史令）

分科会 アフリカの料理に挑戦

「アフリカの料理に挑戦」の分科会では、アフリカの料理を4品作りました。日本人の感覚では少し考えられない組み合わせの食材を入れていくものもあり、少々びっくりしました。実際に食べてみると想像していたよりおいしいものばかりでした。この分科会で作った料理は昼食のメニューの一部として参加者に提供されました。アフリカの方々は、口々に「懐かしい味だった」「おいしかった」と言われ、作った自分たちも非常に嬉しい気持ちでいっぱいでした。今回のアフリカの子どもの日に参加したことによって、アフリカのいろいろな国の人や、日本とまったく違うさまざまな文化に触れることができたのでとても良かったと思います。また、普段話す機会のない外国の方と英語でコミュニケーションを取ることができとても良かったです。　（実行委員　千原台高校　石原雄也）

アフリカ料理 調理メニュー

1. ウガリ
2. イリムドヴィ
3. 魚のスパイシー揚げ
4. カシャタ
5. フルーツサラダ

アフリカ料理の指導にあたったタンザニアのマテミュさんより

The group was good, we tried to deliver based on the ingredients we had, eventhough that Ugali didnt taste exactly like Tanzanian ugali!　I think the cook's must work together especially during presentation so as to come up with group ideas and not only one person ideas! I think other groups did the same..., discussing together and give one say as a group.

I had a great time and learn so many things I've ever think of.., like Minamata disease.　Thanks for your kindness and hospitality, hope you will keep the same spirit to make Kumamoto the place where every African would wish to visit or live.

（信州大学.Atanasia Mattemu）

分科会 アフリカへの支援—私たちにできること

私たちの分科会では、最初に(財)日本ユニセフ協会専務理事の早水研氏から国連のデータに基づいてアフリカの問題が紹介されました。世界で起きている問題の多くはアフリカに集中し、その中でもサハラ以南のサブサハラと呼ばれる国々に特に集中しているそうです。アフリカの抱える問題としては、経済格差やHIV、マラリアによる感染症、降水量の急激な減少と気候難民の問題、紛争問題などがあります。このような現状を踏まえて、後半はアフリカへの支援について意見交換が行われました。といっても、私たち日本の生徒からはほとんど意見が出ず、アフリカの留学生からの意見が専らでした。留学生は必死にアフリカの人々の気持ちを私たちに伝えてきました。ある留学生は「私たちは沢山のお金が欲しいんじゃない。私たちは皆さんと一緒にアフリカの抱える問題について考え、少しずつ問題を解決していきたいんです」と言いました。この言葉は、とても強く、私たちの心に響きました。私たちにできること、それはアフリカのそれぞれの国の現状を理解し、それぞれの国にあった支援を考えて、実行することです。同世代としてアフリカの子どもたちにどう手伝うのか。アフリカの人々と連帯意識をもって考える必要があります。

衣川賀穂(専修大学玉名高等学校1年)

分科会 アフリカの音楽を楽しもう

「アフリカの音楽を楽しもう」。表題のようにジェンベをみんなで叩きながら楽しいひと時でした。講師の村本氏に選曲していただいた「アフリカの男女が楽しく語らう際の音楽」を練習しました。アフリカの方の9名を含め、当日の新聞を見て飛び入り参加した方など、子どもから大学生まで約40名の参加でした。練習が終る頃には、他の分科会を終えたアフリカの方々が音を聞いて吸い込まれるように踊りだし、とても盛り上がりました。村本氏のアシスタントとして崇城大学や熊本学園大附属高校のお弟子さんが10名ほどお手伝いに来てくださり、裏方として優しく参加者をリードしてくださいました。やはり音楽は国境もなく誰もが共有できるものでした。

(谷脇則子)

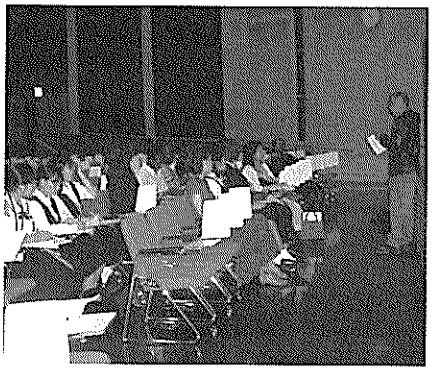
協力隊(マラウイ)から帰ってきたばかりでしたので、ウガンダのビデオや、お話など懐かしく思いました。ありがとうございました、頑張ってください。

(一般　女性)

分科会 日本におけるアフリカ報道と現実

私たちは「日本におけるアフリカ報道と現実」について話し合いました。その中で「日本メディアはアフリカについての報道をあまりしない」ことがわかりました。また、その数少ない報道で伝えることは、貧困などといったネガティブなことばかりです。決してその報道が間違っているわけではないのですが、私たちは報道によりアフリカに対して誤った認識を持つことがあります。だから、これからの日本メディアには、ネガティブな面とポジティブな面の両方の角度からアフリカの報道をしてもらい、私たちも正しい認識を持てるように努力したいと思います。そのために、日本に居るアフリカの方にもアフリカの理解のために協力していただきたいです。

（実行委員　九州学院高校　野呂一葉）

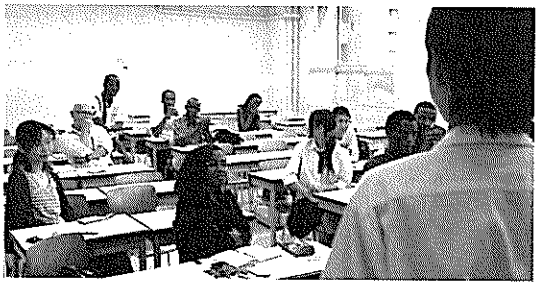


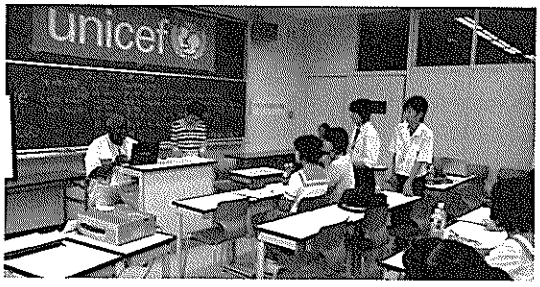
分科会 アフリカと日本における教育の現状と展望

日本ユニセフ協会の菊川さんを講師にお招きして、アフリカと日本における教育の現状と展望というテーマでディスカッションをしました。日本とアフリカの教育について比較してみると、就学率はほとんど差がなかったのですが、識字率になると差が倍近くなることがわかりました。

菊川さんのお話によると、教育が浸透しない原因は多様な言語による教育の複雑化、遊牧民のライフスタイルのあり方などの問題点があるとのことでした。アフリカの留学生の方々に自国での様子を教えていただくと、無償教育や昼食の無料化などの政策をとっているそうです。分科会に参加してアフリカの事を全く知らなかったと改めて思いました。

（実行委員　ルーテル学院高校　桶田慧子）





「アフリカの子どもの日」には今回初めて参加しました。アフリカの学生の意見等を聞き、自国に対しての考えの深さに驚きました。今までアフリカに対する知識がとても偏っていることに気づき、自分にできることはないかと考えさせられました。これからは自分の周りの人、一人でも多くの人に今回学んだことを、伝えていきたいと思いました。

（一般　女性）

分科会＆パネルディスカッション　講師プロフィール

（アルファベット

ンダギジマナ・ジャスティン　（ルワンダ共和国）–パネリスト

1985年、ルワンダの首都キガリのキミフルラ-ガサボ生まれ。ビイマナ高校卒業後、2006年に来日し、日本語学校を経た後
2007年から2010年まで熊本高等専門学校の情報電子学科で学び、2010年4月より熊本大学工学部情報電気電子学科に在学中

早水　研（はやみ　けん）　パネリスト＆分科会「アフリカへの支援–私たちにできること」講師

1949年、東京生まれ。1973年国際基督教大学卒業後、日本航空（社）入社。営業・マーケティング部門、航空協定関連業
情報システム企画、アメリカでの人事・労務、客室サービス企画、IR部門などを歴任。学生時代から国際開発協力に関心
持ちつづけ、2001年7月日本ユニセフ協会事務局長に転身。2006年1月より現職。

戸次元子（へつぎ　もとこ）　分科会「アフリカ料理に挑戦」講師

管理栄養士。昭和41年熊本女子大学（現熊本県立大学）家政学部卒業、昭和48年から平成19年まで熊本商科大学（現熊本学園
学）に勤務。県内の多くの地域や団体へ、栄養および調理指導にあたる。ラジオ番組や情報誌でアイディア料理の紹介など多岐
わたり活動。熊本城築城400年記念事業「熊本藩士のレシピ帖」作成・調理。熊本学園大学関連会社（株）グリーンキャンパス取締

菊川　穣（きくがわ　ゆたか）　分科会「アフリカと日本における教育の現状と展望」講師

1971年神戸生まれ。ロンドン大学ユニバーシティーカレッジ地理学部在学中に、国際機関やNGOを通して途上国
フィールドとする開発支援分野に関心を持つ。同大学教育研究所での修士課程、及び、国内での民間シンクタンク勤務を
て、1998年よりユネスコ南アフリカ事務所にて教育担当官として勤務。2000年にユニセフに異動し、6年半レソト、エリ
アでの現地事務所において、調整・管理業務に関わる。2007年より（財）日本ユニセフ協会勤務。

村本　大（むらもと　ひろし）　分科会「アフリカ音楽を楽しもう」講師

熊本ジェンベクラブ代表。1995年に熊本ジェンベクラブを結成、アフリカンパーカッションの企画、演奏を行う。第5
くまもと未来国体では、開会式アトラクションとして熊本ジェンベクラブが、100人でジェンベを演奏する。現在、イベ
ト・ワークショップなどを中心に各地で活動している。

大津司郎（おおつ　しろう）　分科会「アフリカの実像を知る」講師

フリージャーナリスト。1975年青年海外協力隊として3年間タンザニアで農業指導。92年以降ルワンダ、コンゴ、スー
ン、アンゴラなどの紛争地域での取材を行う。日本人としてはじめて1992年に南部スーダン・ゲリラ基地に、1995年にル
ワンダ・ギタラマ刑務所に単独潜入。最近、ソマリアとコンゴ民主共和国東部を取材。テレビのドキュメンタリー番組で
アフリカの自然コーディネーターとして活躍。近著に「アフリカン　ブラッド　レアメタル」（無双舎）

澤　良世（さわ　ながよ）　コーディネーター・通訳

1985年から2004年までユニセフ駐日事務所広報官を務める。黒柳徹子ユニセフ親善大使の視察などに同行し、30以上の
や地域を訪問した。ユニセフ定年退職後、東京大学大学院総合文化研究科（超域文化専攻）博士課程に在籍。研究テーマは
争後のシエラレオネにおける和解と平和構築。第23回（平成14年度）JICA国際協力フォトコンテストでJICA総裁賞を受賞

徳永瑞子（とくなが　みずこ）　パネリスト＆分科会「アフリカ・日本　子どものいのちの重さ」講師

NGO「アフリカ友の会」代表。1971年から数次にわたってアフリカの地域医療に携わり、現在も中央アフリカ共和国で
イズ患者の治療と予防活動、エイズで親を亡くした孤児や栄養失調の子供たちのケアなど総合的な活動をしている。昭
45年九州大学付属助産婦学校、昭和51年にベルギーのレオポルド王記念熱帯医学校卒業。平成15年に長崎大学医学部保
学科教授。平成19年より聖母大学教授。フローレンス・ナイチンゲール記章、読売国際医療功労賞など受賞多数。

和崎春日（わざき　はるか）　講話、パネリスト＆分科会「アフリカの歴史と文化に学ぶ」講師

1949年生まれ。30年前からおよそ20回のアフリカ行きを重ねて、アフリカ大陸に6年半の間居住。タンザニアやカメル
ンの村を中心に、牧畜民、農耕民、都市住民とともに生活。カメルーンのバムン語に精通し、バムン王国より王子のタイ
を授与される。2009年度まで名古屋大学大学院教授、現在は中部大学教授。前日本アフリカ学会副会長、現理事。

講師からのメッセージ

第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoに参加して

アフリカ友の会　徳永瑞子

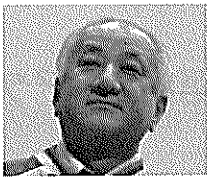
南アフリカは、ワールドカップで燃えていますが、熊本は、ワールドカップをしのぐアフリカのエネルギーが爆発しました。初めて参加して、アフリカにいるような錯覚さえ覚えました。アフリカの留学生たちは、好奇心旺盛で積極的でしたが、参加した高校生たちの目はもっと輝いていました。彼らの今後の成長が楽しみです。

国際交流は、共に集うことからしか始まらないと思います。お互いの国の食事を共に食べ、共にタムタム（太鼓）をたたきながら心が通じあうのです。言葉が通じなくても、心は通じるのです。お互いの文化の違いを認め合い、異文化を学び楽しむことが国際交流の出発点だと思います。

私たちは、この好機に「アフリカから学ぶ」必要があると思います。アフリカには、自殺をする子ども、いじめたりいじめられたりする子どもの話も聞いたことがありません。アフリカは、日本よりも健全な社会なのです。アフリカには、私たち日本人が既に失ってしまった「何か」があります。その「何か」を探すために、もっともっとアフリカを知りましょう。熊本で探すことができると思います。

実質的中心にたっても「威張らない」精神 ークマモトが実現してきたもの

中部大学教授　和崎春日



今回、私は、サッカーのワールドカップ世界大会の時期にちなんで、サッカーの世界に見られる「アフリカ性」に注目した。ヨーロッパ人の監督は、アフリカ人選手に守備の要とフォワードの要をまかそうとする。そういう人材をいつも探している。コートの中盤でタクトを振る頭脳指揮者の役をアフリカ人に求めているわけではない。つまり攻撃でも守備でも、屈強な肉体で相手を蹴散らす役割をアフリカ人選手に求めている。アメリカン・フットボールの世界では、頭脳指揮者のクォーターバックに「黒人」選手（アフリカ系アフリカ人）が長らく入ってこなかった。でも今は違う。何人もいる。サッカーの世界では、まだ、アフリカ=「肉体」が闊歩している。日本サッカー・アナウンサーも、アフリカ人選手を見てきわめて安直に「身体能力の高さ」と説明する。アフリカ=「肉体」から離れられない。こうした固定観念から脱して、アフリカ人選手の知的で頭脳的なプレーをも評価する、多様な選手イメージが自由に描かれる時代に早くなりたいものだ。そのための日本ユニセフ協会熊本支部のエネルギーは、本物だ。継続の力がある。入れ替わり立ち代わり、人が現れる。休んでいたかと思えば、復活する。そして、だれもが、「救済」や「援助」につきまとう、「・・・してあげる」という、「あげる」方がおちいりがちな傲慢を、いつもわが身に振り返って戒めようとする自己意識がある。アフリカを見下ろさない。自省的である。アフリカから学ぼうとする。だからこそ、これまで続いてきたんだろう、と納得させられる。熊本ユニセフのエネルギーは、奥深い。威張らないけど、間違いなく、日本のユニセフ活動の中心を占めている。東京やヘッドクォーターは、とかく役職の顔だけはそろえ「国際」を過度に謳った晴れやかなイベントに傾注しがちだが、熊本ユニセフのような、時間をかけた地味な基礎を積み上げた、もっと地道な「アフリカ－日本－諸外国の架橋」を真似まなんで、これにエネルギーを注いでいってほしい。アフリカの「貧しい人々」を「助けよう」といいつつ、地方を見下ろす視線や発言があるその意識の矛盾に、早く気づくべきだろう。熊本ユニセフのような自省的な抑制は、おそらく差異を超える高い世界の精神になっていくだろう、と信じる。

アフリカの実像を知る

フリージャーナリスト　大津司郎

今年もやっぱりアフリカ人出席者（10人程）の中から批判的意見が出た。それは去年（2009年）に日本テレビＮＥＷＳ　ＺＥＲＯで放送した「ソマリア報告」（海賊や刑務所、銃撃戦など）のＶＩＤＥＯを流した後だった。

アフリカのネガティブな面を放送するのはよくないという意見だった。ボクは正直またかと思った。ただ去年ほど一方的、感情的発言ではなかった。去年はルワンダの虐殺教会のＶＩＤＥＯを流した。南ア出身の発言者が言うにはルワンダ虐殺は過去の出来事であり、ネガティブだという。彼は極めて感情的に噛みついてきた。しかし、ルワンダに行けばわかるが、16年前（1994年）に起きた80万人の虐殺はルワンダの人々にとって決して過去の出来事ではない。ルワンダの人々は今もなお深い苦しみと悲しみを心に抱きながら和解と再生に向けて国作りに汗を流している。過去があっての今であり、そして未来である。今年（2010年）は、しかし、まったく違った見方がケニア人から出た。メディアもビジネスである限り、インパクトのある映像、出来事を報道するのは当然であるという。次のようなことがいえると思う。ネガティブであるか、ポジティブであるかを決めるのは一つの見方（あるいは価値観）にすぎない。事実はそこに間違いなくある。それはさらにビジネス（'商業的'価値）という鋭利な刃物によって断られる。

アフリカの音楽を楽しもう

熊本ジェンベクラブ代表　村本　大

分科会では、大人も子どもも言葉の壁を越えて、楽しい時間を共有できたようです。私の伝えたい「音」ジェンベを叩くだけではなく、顔の表情や体全体でリズムを表現する。時間を経て参加者のリズムがあってくると、ひとつの音楽に人がひとつになることができる近道ではと感じました。

ランチタイムの発表会、皆さんのジェンベの音に導かれて、自然に体がダンスを。たくさんのゲストの方々が少しずつ熱くなり、一時はどうなるかと心配されたようですが。そう、アフリカでは日常がこうなのです。今後、アフリカ音楽や文化を広めて、理解者やファンが増えるように精進致します。ユニセフの皆さまにこのような機会を与えて下さって感謝いたします。

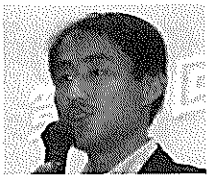
講師からのメッセージ

第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoに参加して

管理栄養士　戸次元子

私は国際ソロプチミスト熊本に所属していますので、ユニセフの行事には出来るだけ参加させて頂いています。本職が管理栄養士ですので、今回の分科会では「アフリカ料理に挑戦」を担当致しました。南アフリカでサッカーのワールドカップが開かれている事もあって関心が盛り上がっている様に感じました。アフリカの方たちも気持ちよく協力して下さり、主食であるウガリは、材料が熊本では手に入りにくいので珍しく、お手本を示して頂いて学びながら皆で挑戦しました。鶏肉を煮込んだイリムドヴィ、ピーナッツ入りのカシャッタ、魚のスパイシー揚げ、フルーツサラダをアフリカの方に味見をして頂きながら楽しく料理作りで交流が出来ました。千原台、熊高、第一高、ルーテル高の高校生にも良い勉強になったと思います。アフリカからのエネルギッシュなそして、しっかりとした留学生の方々の努力とユニセフ運営委員の皆さまの長い活動の努力には、本当に心から敬意を表します。

第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoに参加して



(財)日本ユニセフ協会　団体・組織事業部　菊川　穣

アフリカの年から50年になる記念すべき年に開催された「アフリカの子どもの日」in Kumamotoに参加させて頂き本当に有難うございました。98年から2000年まで南アフリカ共和国、その後もユニセフでアフリカの子どもたちに関わってきた私にとって、アフリカの子どもの日は特別な意味があり、今回、分科会で教育をテーマに話ができたことは大変印象深かったです。ルーテル学院高校の生徒さん達からの良くまとまったウガンダと日本の教育比較報告の後、私からは、アフリカにおける教育の困難な現状、及び、日本と共通する今後の展望についてのプレゼンという、1時間半という分科会の時間からは、かなり強引な展開でしたが、留学生の方々からも様々な意見が伺え充実したひと時でした。これまでの活動を支えてこられた、世良さんをはじめとした日本ユニセフ協会熊本県支部のボランティアの方々に心より感謝の意を表したいと思います。

「アフリカの子どもの日」に参加して、本当のアフリカを知らなかったことに驚きました。日本で報道されているアフリカは、本当の姿ではなく誤った印象を持ってしまうのではないかと思いました。たとえばアフリカの報道では、とても貧しい状況の映像ばかり流れていますが、アフリカにも大都市もありますし、携帯やテレビもあります。これからは若い人たちの意識を変え、本当のアフリカについて興味を持ち、伝えていくことが大切だと思いました。

(真和高校1年　豊田かなえ)

僕は金曜日のサッカーに参加し、アフリカの人とふれあいとても楽しい思い出ができました。また今日はアフリカに付いて学び、とてもいい経験ができました。ありがとうございました。　(慶誠高校1年　加藤敦也)

アフリカからの参加者感想

Fortune Ntengwa Jamane(鹿児島大学)ジンバブエ

サッカーチームの一員として参加できて非常に幸せでした。日本人の学生達とスポーツベースで交流ができて素晴らしい時間を過ごすことができました。ホームステイも大変良かったです。今後も続けて欲しいと思っています。イベント中、日本人の家庭にお世話になったことは大変嬉しく、まるで本当のお父さんお母さんと一緒のようでした。

分科会は実りの多いイベントでした。但し、午後の報告会は、多くの人々が提案や質問があったのに、時間が非常に限られていて、それを伝えることができなかったよう思いました。

アフリカからの参加者感想

Zak Yakubu(岡山大学)ガーナ

我々は、アフリカの子どもの日という重要な年中行事を開催して下さったユニセフ熊本支部に非常に感謝致しております。

事実、社会的・学術的・文化的・経済的・その他に亘るメリットというものは計りしれません。熊本支部にお願いしたいのは、我々が特にアフリカの子ども、広義では大陸の福祉に対して行ったアピールというものが、適切な関係当局に伝えられることです。

正直、新たな友人を作るという点に関してはあまり言及されていませんが、それぞれの自宅に帰り着くまでに既にお互いがいなくて寂しく思い始めたくらいです。

希望として、ユニセフスポンサーのプログラムの元、教育等の点で優れている方々とアフリカの子どもたちについて議論できればということです。ポジティブなことがネガティブなことを補って余りあるのですが、日本の学生はまだ学ぶことが多く、アフリカのネガティブな観点のみが見えるかと思います。そうすることで、日本の学生がアフリカやアフリカの子どもについてバランスよい考えを持つことにつながると考えます。

JAMES NYIRENDA(九州大学)ザンビア

個人的には、特にサッカーと博物館の訪問が楽しかったです。以下を提案したいと思います。

1. 豊かな多文化環境にするために、アフリカの参加者達を多少均等に広げること。そのためには、最初に何人の留学生達が日本にいるかをサンプルする必要があります。
2. ディスカッションのセッションは、プレゼンターが恐らく15～20分プレゼンを行い、それから参加者達がディスカッションできるように働きかける必要があります。
3. 複数のディスカッショングループに参加したい人がいたらどうなるでしょうか？
4. もし午前中に到着していればツアーに行く前にディスカッションを1回行う時間があったかもしれません。

日本の太鼓(ドラム)も含めて、どの内容も楽しかったです。太鼓を聴くのも、若くて元気のいい日本の女の子達が太鼓をたたくのを見るのも私にとっては初めての経験でした。

Bruno Sunguya(東京大学)タンザニア

何点か今後のイベントが更に良くなるよう、より活気があり、より参加型になり、より楽しいものになるよう、指摘させて頂きたいと思います。

最終日のイベントは非常に過密スケジュールで、ほとんどが時間に追いつこうと急いで行われました。日曜日の重要なセッションの一部を土曜日や金曜日に分散できたら良いと思います。

パネルディスカッションはこのイベントの基幹なので、もっと時間を割いて参加者達がもっと議論できる時間があるべきだと思います。そうすると、更に理解が深まりますし、日本人学生達もトピックについてより分かるようになり質問も多くなると思います。可能であれば、セッションが土曜日の午前中に行われるとよいと思います。

ビジターが訪れる場所が毎回異なるともっと特別なイベントになるかと思います。

Yombo Dan(長崎大学)DRコンゴ

3日間素晴らしい「熊本でのアフリカ」を過ごすことができて、本当にありがとうございました。このミーティングは非常にエキサイティングで興味深く、アフリカ他国の現状についてたくさん学ぶことができました。他のアフリカの留学生達と出会って、家族とは遠く離れていても、私はここで一人ではないのだと感じることができました。分科会では、いかに熱帯病の影響を子ども達が受けているか、現状について知識を共有することが出来ました。今後のイベントへの提案は、以下の通りです:

1・今年よりも多くのアフリカの留学生達を招待することができたら、非常にエキサイティングだと思います。

2・次回への提案として、コンゴ民主主義共和国の大使を招待し、この国の話をすることができればと思います。この国では、過去300万人以上の人々が殺され、女性や子供は依然日常で性的虐待被害者であり、世界の誰もがこの事について何もしようとしていません。大使がスピーチを行うことで、このような子ども達が救われ、教育の機会や保健が提供されるかもしれません。

3・この会を3日間で構成し、2日間建設的な議論を行い、最終日は街に出て交流を楽しむ、というのはいかがでしょう。

Seithati Lephoto(英語講師)レソト

ホストファミリーの皆さんが私に与えてくれた温かいおもてなし、そしてご自宅に泊めてくださったことに心から感謝致します。滞在は本当に楽しかったですし、皆さんの愛情はこれからも決して忘れないでしょう。

去年来日して以来、熊本でのこのイベントが今までで一番思い出になりました。特に皆さんのご親切が忘れられません。本当にありがとうございました。この思い出はこれからも大切にします。

熊本での地域交流　文化・教育

熊本城

雨の中のお城散策

頬当門で

熊本市現代美術館

７月２日金曜日の午前中、アフリカからの留学生とその家族約２０人が熊本市現代美術館を訪れました。彼らがやって来ると、美術館は突然光がさしたように明るく賑やかになりました。

私たちにとって驚きであったのは、留学生の皆さんが展示作品に実におおらかで生き生きと対応していたことです。

最初に彼等を捉えたのは、特別展示されていた和紙で作られた法隆寺で、奈良を訪れたことのある留学生からは、精密に再現された仏教建築に感嘆の声が漏れました。

企画展「へるんさんの秘めごと」では、幽霊とか奇怪な生き物が展示されていましたが、きわめて興味深かったのは、アフリカから来日している若者たちの反応でした。幽霊が描かれた日本画の部屋を彼等は、予想外に静かに通過。魔術にかかったように立ち尽くしたのは、西尾康之の巨大で不気味な人魚像でありました。最後の展示室では、宮島達男の投影された色鮮やかなデジタル数字を手で掬ったり、全員がいつまでも楽しんでいました。現代美術を体全体で感じ取ろうとした彼らの姿が、とても印象的でした。

（館長　桜井　武）

熊本県立美術館、細川コレクション永青文庫展示室、旧細川刑部邸、熊本県伝統工芸館見学

今年も「アフリカの子どもの日」in Kumamotoでは熊本で400年以上つちかわれてきた熊本の文化に触れ見て、認めあうという趣旨のもと熊本城や細川藩があつめた永青文庫、旧細川刑部邸、熊本の伝統工芸が展示されている熊本県伝統工芸館や又、熊本の今を見てもらうために熊本市現代美術館を見学しました。

熊本県立美術館の木本館長や熊本市現代美術館の桜井館長、伝統工芸館赤星館長にはお出迎え頂き大変お世話になりました。

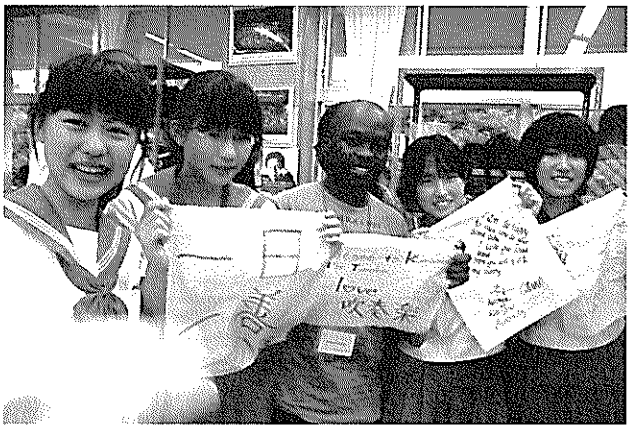
熊本での地域交流　文化・教育

熊本市立白川中学校　吹奏楽で交流

「アフリカの子どもの日」の交流の際は大変お世話になりました。私たちにとって外国の方々と接する機会がもてたことはとても良い経験となりました。ウガンダ共和国大使をはじめ、ケニア、ガーナ、セネガル、エジプトといったアフリカ諸国の方々と過ごした時間は短く感じられました。そんな短い時間でしたが、私たちにとっては、充実していました。まず、私たちのまだまだ未熟な演奏に耳を傾けて下さったことに感謝します。そして、質問に快く答えて下さりありがとうございました。アフリカのことをたくさん知ることができました。バンダナの交換をしましたが、私はとても嬉しかったです。あの瞬間にアフリカと日本の架け橋ができたような気がしてならないのです。これから先、アフリカと日本が今以上に発展することを願います。

（吹奏楽部部長　西澤さくら）

音楽でなごやかに交流



バンダナ交換

「アフリカの子どもの日」のホストファミリーになって

お客様を迎えて、私たちは本当に楽しい時を過ごすことが出来ました。短い時間でしたが、本当の家族のようにして過ごしたので、子どもたちはにはお別れが辛かったようです。アフリカは遠いと思っていたけれど、いつか子どもたちとBernardさんやAttaさんの国を訪ねられたらいいな‥と思うようになりました。 素晴らしい機会を与えていただきありがとうございました。

（宮川　道子）

今回は、留学生お二人で二泊ではありましたが、大したおもてなしが出来なて心苦しく思っております。でも、とても楽しい２日間でした。 こういう事も含め、色んな面で役に立てばという思いで、今年４月から娘と二人で英会話教室に通っています。 もっと英語が堪能になれば‥と思っております。また機会があれば受け入れをさせて頂きたいと思いますので、今後とも宜しくお願い致します。

（河添　千秋）

アフリカからのお二人と二夜でしたが、大変楽しく過ごさせて頂きました。 特にカバさんは、通訳と大変紳士的な行動で(テイジーさんもです)とても受け入れやすくお世話ができました。娘の奈菜美には、お二人ともお疲れの中、いやな顔もされず、お相手していただきまして、娘もお二人が帰られる日は、「どうして、帰るの？」とまだまだ、引き留めたい気持ちでいっぱいになっておりました。息子も中体連が重なりましたが、夜は午前様になるまで話しをして、学校の作文にもこのことを書いたようでした。

今回、この企画にホストファミリーとして参加しましたが、アフリカへの関心はちょうどワールドカップも重なってか、我が家でも話す機会が多くなりました。しかし、アフリカ人のお二人の紳士的なイメージとは別に、真のアフリカの現状(光と陰)を子どもたちや私たちが知ることが必要だと思います。

ウェルカム・パーティでの根っから明るい陽気なアフリカ人、日本人、熊本人もよいパートナーとしてこれからも多面的な面で協力していきたいですね。

これからも、このような企画等で協力ができることがあれば、またご連絡下さい。今後ともよろしくお願いします。

（松本　憲二郎）

第18回
アフリカの子どもの日
in Kumamoto

アフリカ出身の参加者とホストファミリー名簿

所属	名前	国	性	ホストファミリー
熊本県立大学	Hilary Mwimanzi	タンザニア	M	
熊本大学	Ndeugueu Jean Leopold	カメルーン	F	
熊本大学	Ako Andrew Ako (husband)	カメルーン	M	
	Mary Tambe Ako(wife)	〃		
	Ako Agnes Lizza(daughter)	〃		
熊本大学	Gina Akudo	ウガンダ	M	
英語教師	Maureen Chogumaria	〃	F	
英語教師	Juliana Shekalaghe	〃	F	
英語教師	Godfrey Owese Okumu	ケニア	M	
ALT英語教師	Mopailo Thomas Thatelo	南アフリカ	M	
熊本大学	Ndagijimana Justin	ルワンダ	M	
大分大学	Joseph Kwadwo Asenso	ガーナ	M	平山秀樹様
佐賀大学	Joweria Nambooze	ウガンダ	F	河添博幸・千秋様
長崎大学	Mahamoud Sama Cherif	ギニア	M	ジャイルス佐藤様
	Daniel Boamah	ガーナ	M	古閑博明・幸代様
	Evaristus Chibunna Mbanefo	ナイジェリア	M	林　瑞栄・優美様
	Yombo Kalenda Dan Justin	コンゴ民主共和国	M	林　瑞栄・優美様
	Juliann Nzembi Makau	ケニア	F	鷲尾　岬様
	Rose Bitonga Ogata	ケニア	F	河添博幸・千秋様
	Moses Kibunja Kamita	ケニア	M	ジャイルス佐藤様
鹿児島大学	James Okwe Chibueze (husband)	ナイジェリア	M	那木保文・百代様
	Chioma Ezinne Chibueze (wife)	〃	F	〃
	Mohamed Ahmed Elfiky (husband)	エジプト	M	世良好史・喜久子様
	Dalia Hisham Ibrahim (wife)	〃	F	〃
	Hana (daughter, 2.5 years old)	〃	F	〃
	Bernerd Mulwa Fulanda	ケニア	M	宮川経範・道子様
	Benjamin Dotto Majanga	タンザニア	M	野田正一郎・涼子様
	Fortune Ntengwa Jomane	ジンバブエ	M	岡本定昭・真理様
九州大学	James Nyirenda	ザンビア	M	園田盛彦・寿美子様
	Harriet Malabo Nyirenda	〃	F	〃
	Khumbo Mary Nyirenda (daughter 3 years old)	〃	F	〃
	Chimwemwe Gershom Nyirenda (son 1 year old)	〃	M	〃
	Jacqueline Kubochi Makat	ケニア	F	寺倉宏嗣・珠実様
	Ahmed Mohsen Hamdan	エジプト	M	岡本定昭・真理様
	Ralph Edem Agbefu	ガーナ	M	田中啓志・昭子様
	Asemota Omos Joseph	ナイジェリア	M	橋口寛則・久美子様

アフリカ出身の参加者とホストファミリー名簿

所属	名前	国	性	ホストファミリー
宮崎大学	Mahmoud Tanekhy	エジプト	M	田中節子様
	Basma Mohamed Dahdouh(wife)	〃	F	〃
	Maryam (daughter 4 months old)	〃	F	〃
	Jean Fall	セネガル	M	田中啓志・昭子様
九州工業大学	Michael Bernard	リベリア	F	竹屋元裕・純子様
小樽商大	Melkiory Philemon Ngido (husband)	タンザニア	M	フィリップ（熊大留学生）様
北海道大	Veronica Raphael Balua (wife)	〃	F	〃
	Abigail Melkiory Ngido (daughter 3years old)	〃	F	〃
東京大学	Bruno Fokas Sunguya (husband)	タンザニア	M	〃
	Linda Beatrice Mlunde (wife)	〃	F	〃
	Belinda Bruno Sunguya (daughter 4 months old)	〃		〃
政策研究大学院大学	Atta Snr Dabone	ガーナ	M	宮川経範・道子様
政策研究大学院大学	Peter Aidoo	ガーナ	M	岡本定昭・真理様
政策研究大学院大学	Seithati Victoria Lephoto	リソト	F	武宮利徳・公子様
政策研究大学院大学	Mohammed Shafiq Mamudu	ガーナ	M	前田睿代子様
信州大学	Athanasia Matemu	タンザニア	F	フィリップ（熊大留学生）様
京都大学	Patou Masika Musumari	DRコンゴ	M	岡本定昭・真理様
大阪大学	Magot Diata Omokoko	DRコンゴ	M	岡本定昭・真理様
大阪産業大学	Herbert Ben Ayebazibwe	ウガンダ	M	竹屋元裕・純子様
岡山大学	Charles-Alex Koudou	コートジボアール	M	ジーナ（熊大留学生）様
岡山大学	Zak AbdallahYakubu	ガーナ	M	橋口寛則・久美子様
高知大学	Henrietta Terko Dou	ガーナ	F	大川原小夜子様
横浜（英語教師）	Linda Esi Datsomor	ガーナ	F	-
横浜（　〃　）	Dennis Kwami Datsomor	〃	M	-
東京	Bernice Kwarteng Gyamfi	ガーナ	F	-
岐阜（英語教師）	Cheick Ahmed Tidiane Kaba	ギニア	M	松本憲二郎様
茨城（会社員）	Raphal Eboku	ウガンダ	M	-
京都（　〃　）	Yiga Allan	ウガンダ	M	-
立命館アジア太平洋大学（APU）	Amos Totteh Dordjie	ガーナ	M	松本憲二郎様
	Taurai Chinyamakobvu	ジンバブエ	M	西　二郎・美由紀様
	George Nkrumah Ansere	ガーナ	M	西　二郎・美由紀様
	Terence Be　yela Nwana	カメルーン	M	盛山　茂・恒子様
	John Waran Michael	スーダン	M	中村好郎・麗子様
	Lawrence Bakora Mososi	ケニア	M	盛山　茂・恒子様
	Rabson Landson Kachala	マラウィー	M	野田正一郎・涼子様
	Andrew Omwoyo Mose	ケニア	M	盛山　茂・恒子様
	Tarnue Kootee Korvah	リベリア	M	中村好郎・麗子様
	Nguemmogne Melanie Yotagi	カメルーン	F	武宮利徳・公子様
	Tshepiso Mmolai	ボツワナ	F	宮本佳代子様
	Bidossessi Toffa	ベナン	M	原野愛弓様
	Vitalis Menya	ウガンダ	M	平山秀樹様

共同声明

私たちは、第１８回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoに参加し、交流会、分科会を通して、アフリカと日本がお互いについて深く理解しあうことができました。ウガンダ大使のお話にもあったように、今日の世界の若者にはたくさんの課題があります。しかし、いろいろな人と交流し、お互いに理解しあい、なおかつ、自分の夢を叶えるために努力することができれば、夢は必ず叶うということを学びました。また、それぞれの分科会を通して、日本とアフリカの人がお互いを理解できただけでなく、アフリカのそれぞれの国同士でも理解しあえたことでしょう。第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoで得た知識、経験を私たちがメッセンジャーとなり、周りの人たちに伝えていきたいと思います。「アフリカの子どもの日」は、悲しい出来事の結果として制定されましたが、これから私たちは、子どもの健康と明るい未来のために協力しあっていきましょう。

作成者：ジョエリア（ウガンダ）　坂本瑞紀　山口茜（ルーテル学院高校）

実行委員会

今年は、高校生を中心に４回の実行委員会を開き、企画を練り準備をしました。

● **第１回実行委員会**

講演「国連職員として過ごした９年間のアフリカ生活」
講師：菊川　穣氏　（（財）日本ユニセフ協会職員、元国連ユニセフ職員）
日時：４月２６日（月）　１７：００～１８：３０
場所：くまもと県民交流館パレア　第１会議室
参加者：７５人

● **第２回実行委員会**

分科会ごとに分かれ、内容の企画、当日の役割決め
日時：５月８日（土）１５：００～１７：００
場所：熊本市現代美術館　アートロフト
参加者：５０人

● **第３回実行委員会**

ウガンダの映画「ラストキング・オブ・スコットランド」鑑賞と委員会
日時：６月１２日（土）１４：００～１７：００
場所：自立の店「ひまわり」
参加者：６２人

● **第４回実行委員会**

最終打ち合わせ、分科会会場の確認など
日時：６月２６日（土）１４：００～１６：００
場所：熊本学園大学4号館　４２７号室
参加者：５０人

● **反省会**

日時：７月３１日（土）１４：００～１６：００
場所：中央公民館
参加者：３７人

今回の講演を聞いて、日本では想像できないような出来事が起こっているのだと思いました。HIVの母子感染や栄養失調で亡くなる人が多いこと、十分な治療ができていれば救われていたかもしれないことなどを聞くと、とてもやるせない気持ちになりました。アフリカや世界の他の国々には、学校にも行けず、食事も十分に取れない人もたくさんいることを心に留め、今の恵まれた私たちの暮らしに、感謝の心を忘れずに過ごしたいと思いました。また今も自分たちにできることを見つけ、ボランティアなどを行っていきたいと思いました。

世界が早く平和になるといいなあと思いました。

（慶誠高校2年　藤本梨華子）

新聞記事

アフリカの子どもの日
ウガンダ大使講演
学園大

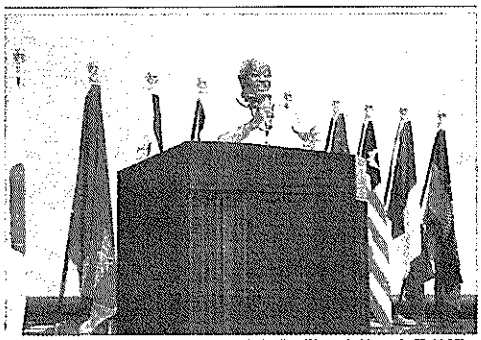
アフリカへの支援と理解を求めるイベント、第18回「アフリカの子どもの日」inKumamotoが3日、熊本市大江の熊本学園大で開かれ、ウガンダ共和国のワスワ・ビリグワ駐日大使による基調講演などがあった。

日本ユニセフ協会県支部（永野光哉会長）が組織する実行委員会が主催で、毎年開いている。中高生やアフリカからの留学生ら約220人が参加した。

ビリグワ駐日大使は自身のアフリカでの体験を踏まえ「日本の、そしてアフリカの若者への課題」と題して講演。アフリカの現状について「水くみや農作業など家の手伝いで学校に行けない人が多い。行けても、昼食時には食べる物がない子どもたちがたくさんいる」などと紹介した。

日本の若者たちに向けては「水をめぐっての紛争がすでにアフリカでは起きている。旅行に行くなどして、若いころから世界に興味を持ってほしい」と強調した。

最終日の4日は同大で、水俣学研究センター顧問の原田正純氏による講演やアフリカの文化などについて学ぶ8つの分科会などがある。（樋口琢郎）



ウガンダ共和国のワスワ・ビリグワ駐日大使による基調講演＝熊本市の熊本学園大学

▲熊日新聞 7月4日付 朝刊

アフリカ料理
アフリカ子どもの日 3・4日、熊本市の熊本学園大

ギニア出身の留学生と一緒にジンバブエの煮込み料理「イリムドヴィ」をつくる高校生（東寛明）

▲熊日新聞 7月10日付 夕刊
フォトピックアップ

十字街

○…アフリカの人たちと一緒にアフリカ料理に挑戦するイベントが4日、熊本市であり、高校生ら約20人が4品を調理した。第18回「アフリカ子どもの日」の分科会の一つ。

○…トマトとピーナツバターをベースにしたジンバブエの煮込み料理「イリムドヴィ」には鶏肉を使用。指導した同国出身の英語教師モリン・チョグマイラさん(30)＝同市＝は「ジンバブエでは鶏肉が牛肉より高価。チキンは特別の日に使う」と説明した。

○…千原台高3年の山下真紀さん(18)はトウモロコシの粉が原料の主食「ウガリ」作りを練習して〝本番〟に臨んだ。もうもうと湯気がたつ鍋を前に「昼も多くて大変。練習より疲れた」と、料理作りの苦労を味わっていた。（東寛明）

▲熊日新聞 7月5日付 朝刊

これまで遠い国だと思っていたアフリカが、だんだん近い存在になってきています。
先進国と開発途上国との関係、民族対立、人権、都市化、環境破壊など、
今日の世界が直面する多くの問題が凝縮されているところがアフリカです。
アフリカを知ることが世界を知り、よりよい未来を創ることにつながると考えます。

ユニセフ～みんなでつくる子どもの未来

昨年のアフリカの子どもの日

第18回
「アフリカの子どもの日」
in Kumamoto
～もっと知ろうアフリカ2010：独立から50年，そして新たな挑戦～

●とき／2010年7月2日(金)～7月4日(日)
●会場／水俣市立水俣病資料館
熊本学園大学 他

参加無料
※経費・交流会は実費となります

7.2 FRI
水俣見学：「ウガンダ駐日大使とともに考える世界の環境問題」
[会場]水俣市立水俣病資料館 他
サッカー親善試合（16:00～）

7.3 SAT
「アフリカの子どもの日」in Kumamoto
[会場]熊本学園大学
13:30～ 基調講演：「日本の、そしてアフリカの若者への課題」
ワスワ・ビリグワ アフリカ共和国駐日全権大使
パネルディスカッション
交流会（18:30～）[会場]熊本ホテルキャッスル [会費]一般5,000円，学生1,000円

7.4 SUN
特別講演：「持続可能な開発：水俣に教えられること」
[会場]熊本学園大学
原田正純 熊本学園大学 水俣学研究センター顧問
分科会
9:00～
①ウガンダの歴史と課題 ワスワ・ビリグワ氏（ウガンダ共和国駐日全権大使）
②アフリカから学ぶこと 和崎春日氏（中部大学教授）
③アフリカ・日本 子どものいのちの重さ 徳永瑞子氏（アフリカ友の会代表）
④日本におけるアフリカ報道と現実 大津和郎氏（フリージャーナリスト）
⑤アフリカへの支援－私たちにできること 年木 隆氏（財日本ユニセフ協会専務理事）
⑥アフリカの太鼓をたたこう 村本 大氏（熊本ジェンベクラブ代表）
⑦アフリカ料理に挑戦 アフリカからの留学生

主催／第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamoto 実行委員会 ●お問い合わせ先／財日本ユニセフ協会熊本県支部〒860-0007 熊本市下通1-5-14 メガネの大宝堂下通店5階 TEL.096-326-2154 FAX.096-356-4837

ユニセフ・マンスリーサポート・プログラム
あなたの月々のご支援が、
貧困の中で必死に生きる世界の子どもたちに、
夢をかなえるチャンスを届けます。
ユニセフ・マンスリーサポート・プログラムは、[金融機関]・[クレジットカード]・の自動引き落としで簡単に子どもたちの支援ができるプログラムです。
ご参加いただいた方に 世界の子どもたちの現状や、ユニセフの活動についてお伝えする機会は「ユニセフ・ニュース」を年4回お届けします。
お問い合わせ・お申し込み
お電話 0120-88-1052
受付時間 9:00～18:00(土・日・祝日休)
WEB 世界の子どもたちの現状をより詳しく知るために、PCをご利用ください。
www.unicef.or.jp ユニセフマンスリー 検索
郵便 〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス（ハガキ裏記入例）
財日本ユニセフ協会
「マンスリーサポート プログラム」係
ご住所
お名前
お電話番号
ご利用カード
資料請求書
財日本ユニセフ協会（ユニセフ日本委員会）
〒860-0007 熊本市下通1-5-14 メガネの大宝堂下通店5F
財日本ユニセフ協会 熊本県支部
TEL.096-326-2154 FAX.096-356-4837
ユニセフマンスリーサポート・プログラム資料請求係
unicef

▲熊日新聞広告

第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoを終わって

第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamotoは、多くの地域の皆さまのご支援、ご協力のもと、今年も開催することができました。

４月にはアフリカに国連職員として９年間過ごされた、日本ユニセフ協会菊川穣氏の講演を聞き、高校生が中心になり実行委員会が作られ、各分科会や当日の司会等、皆で試行錯誤のなか準備を進めてきました。実行委員会は60名で高校生が中心でした。

今年はウガンダのワスワ・ビリグワ全権特命大使をお迎えすることができ、大使の子ども時代、ボストンで苦労された学生時代、前大統領の時代にウガンダ民族解放戦線に参加されたことなど、大使の人生を通してアフリカを語られたことは、真のアフリカに触れることができ印象深いものでした。

この数年アフリカからの参加者は、国費留学生をはじめＡＰＵの学生がほとんどで、募集をかけると瞬く間に定員に達しお断りをする盛況振りで、今年は北海道から鹿児島まで70名を超える参加者でした。インターネットの時代、留学生の間では熊本での民間で行う「アフリカの子どもの日」in Kumamoto は話題になっているようです。アフリカ各国からの留学生が毎年集う日本での唯一の集まりとか‥‥。

ただ、熊本の高校生を中心とする実行委員会と、アフリカの国々を代表して来日されている留学生たちとの間には、知識、見識、視野の広さ、自立した行動、判断力等多くの点で、かみ合うことができるのかと気になるところでした。しかし、そのような思いも杞憂で、交流会での参加者の皆の笑顔、分科会等を通してアフリカの留学生の白熱した議論を目の当たりにすることができた熊本の高校生にとって、まさに異文化を肌で感じ、日本の外を感じる素晴らしい機会であったと思います。

また、熊本での「アフリカの子どもの日」の大きな特徴は、熊本に来られた留学生をホームステイで迎えることです。イベントとともにホストファミリーの方々との交流は、アフリカの学生だけではなく、熊本のホストファミリーの皆さまにとっても異文化を体験する貴重な機会でもあったと思います。

毎年、この「アフリカの子どもの日」にちなんだ活動を続け、試行錯誤の中で積み上げてきたまさに手作りの活動です。私たちにとって知れば知るほど知らないことがわかり、触れれば触れるほど限りない魅力を感じるアフリカを、これからも「もっと知ろう！アフリカ！」という視点を持ってこの活動を地域の皆様と続けていきたいと思います。

２０１０年８月１６日

第18回「アフリカの子どもの日」in Kumamoto 実行委員会一同
(文責　世良)

開催にあたりご支援ご協力をいただいた方々〈順不同〉

熊本学園大学
熊本県
熊本市
熊本日日新聞社
水俣市
㈱大塚製薬
藤間絲恵氏
水俣市立水俣病資料館
熊本県環境センター
熊本市現代美術館
熊本市立白川中学校
熊本市立必由館高校 太鼓部
熊本中央高校
喜多流狩野琇鵬門下生 出田節子氏
㈳熊本県サッカー協会
㈱セルモ
㈱桃
熊本ジェンベクラブ
裏千家 松田社中
ギニア音楽家ラミン・バラミ氏

分科会発表のようす

講師の先生方よりひとこと

熊本でできたアフリカ大陸の仲間

さようなら、また来年!!

㈶日本ユニセフ協会　熊本県支部

〒860-0807 熊本市下通1-5-14 メガネの大宝堂下通店5F TEL.096-326-2154 FAX.096-356-4837
ホームページ http://www1.odn.ne.jp/unicef-kumamoto/　公益信託 くまもと21ファンド助成事業

For every child
Health, Education, Equality, Protection
ADVANCE HUMANITY

unicef